

## 登場人物

上妻初美（あがつま はつみ）

喧嘩最強元ヤンキーお母さん。四十一歳。長い金髪。バイク好き。沼尾さん大好き♥♥♥

上妻俊幸（あがつま としゆき）

初美の夫。サラリーマン。四十歳。痩せ型のひ弱な男。眼鏡。

上妻大吾（あがつま だいご）

初美と俊幸の一人息子。大人しい。

沼尾（ぬまお）

初美の前に現れた謎の中年男。ハゲでデブで見るからに気持ち悪いオーラに溢れる。初美の彼氏。

前回のあらすじ

喧嘩最強だった元ヤンキー初美は、非行の道から救いだしてくれた俊幸と結婚。大吾という息子にも恵まれ、母親として幸せな日々を過ごしていた。

しかし、ヤンチャだった時代の援交の映像を何故か持っていたキモデブハゲ親父沼尾に脅迫され、その生活は一変する。

沼尾に従い、体を許すことを決断した初美は、様々な変態プレイを彼に要求される。奇天烈極まる卑猥な言葉をいわされ、エロいバカ女の演技をさせられ、息子が同じ家にいる中でセックスを強要され、滅茶苦茶に犯される。

なによりも彼女を苦しめたのは、沼尾の類稀なる極太チンポだった。感じたこともないような圧倒的快感に、初美は次第に魅了され、それ

から離れられなくなっていく…。

やがて、初美は沼尾からの誘いに応じ、普通に彼と付き合い、不倫することを決意するのだった。

初美はその胸に、あんなに嫌だったキモデブハゲ親父への男としての好意を、確かに自覚していた…。

上妻大吾は、このところ機嫌が良かった。一時不審な行動が目立つように思われた母の初美が、すっかり元の調子に戻ったからだ。今の母には、全くおかしい様子はない。あの急ぎたてるような妙な不安感は、どうやら大吾の思い過ごしだったらしい…。

「よっしゃ！じゃあ二人とも、気いつけてな！頑張ってこいよ！」

平日の朝。仕事と学校に向かう父の俊幸と大吾を、母はわざわざ玄関の外まで出て見送ってくれる。この儀式的な朝の日課も、ちゃんと復活していた。

「うん。いつてくるね、初美ちゃん」

「お母さん、いつてきまあゝす」

途中まで同行する俊幸と大吾は、親子仲良く二人並んで歩いていく。その背中に、初美が激

励の声を飛ばす。

「おお！　いつてこい！　二人とも、思い切りぶちかましてこいやっ！」

元ヤンキーらしい乱暴で下品な物言いに、大吾は思わず苦笑いをこぼしてしまう。けれど、なにかこの家族ならではのものを実感出来て、一方ではとても嬉しく思っていた。

大吾は、自らの家族特有のこの感じが、愛しくてしょうがないのだった…。

※※※

「……………」

道の先に向かってずんずん歩を進めていく夫と息子の後ろ姿を、初美はじっと見つめてい

た。彼女が立つ場所から、彼等は既に二十メートルは離れていた。もう振り返る心配はないように思われた。心の中でそれを確認してから、初美は小さな声で呟いた。

「…俊幸…大吾…会社と学校で…仕事と勉強…バツチりぶちかましてくんだぞ…あたしも今から…不倫チンポ思いつ切りぶちかましてまうからよ(笑)」

そうして口元に、悪意に満ちたとても妖しい笑みを浮かべた…。

その時だった。

上妻家の玄関先からは死角になっている場所から、ぬるりと一つの影が飛びだしてきた。お馴染みの悪趣味なからし色スーツ。ぶくぶくと肥え太った丸い体。両脇のわずかな頭髮のみを残して無惨にハゲあがった頭。吹き出物だらけの醜すぎる顔面。

初美の愛する彼氏……沼尾だった。

沼尾は黙って初美に接近すると、その両肩をガシッと掴み、断りもなくいきなり唇に強力な口づけをした。

「んん、ぶちゅううううう！んん、初美さん！初美さん！んん！ぶちゅちゅううう！にゅちゅちゅちゅううううう！！！」

確かに二人の家族は、もう道の大分先にいる。突然こちらに視線を向ける可能性も低いだろう。だが、勿論それは絶対ではない。息子がかを思い出してふっと家の方を顧みれば、母親の不貞のキスをまざまざと目撃されてしまうのだ。

にもかかわらず、初美は…。

「んん！ぶちゅれるえろえろれろ♥はあ！沼尾さん！沼尾さん！沼尾さん好き好き好き好き好き好き♥♥♥♥はあ！あ

あ！んん！べろべろ！えろえろえろえろれろ  
れろれろれろれろ♥♥♥」

不倫相手を押しのけるどころか、脂肪まみれのその体に自分からガシリと抱き着き、恐るべき勢いで舌を回転させて彼の舌を舐めまくったのだった。

「はあ！初美さん！初美さん！んん、ぶちゅううう！れろえろれろれろ！べろべろべろべろべろべろ！」

「んん、ああん♥沼尾さん♥沼尾さん♥えろれろぶちゅうずちゅ♥んん、んんっ！えろえろえろえろえろえろえろえろえろ！」

二人はなんの迷いもなく、道端で舌を卑猥にぶつけ合う高速ベロチューに耽る。唾液の飛沫が激しく弾ける。こんな軒先で不貞行為に及べば、当然いきなり玄関を開けた隣人にそれを見られるリスクもある。だが、二人はまるで構わ



なかった。

それどころか、さらなる危険なミッションに挑む。視線を交わしてなにやらアイコンタクトした二人は、揃って初美の家族の方に顔を向けた。もう大分離れたが、その後ろ姿はまだちゃんと視認出来た。事前に申し合わせていた通り、二人はその背中めがけてメッセージを放つ。

彼等に聞こえてしまうかもしれないほどの大声で。

顔面を密着させたラブラブベロチューを少しも緩めることなく。

バカ丸出しのダブルピースを、二人揃ってその背中に向けて…。

「べろべろべろべろ！んん、旦那さぁ〜ん♪息子さぁ〜ん♪んん、べろべろべろべろべろ！わたくし！お二人の大切な奥様！大切なお母様を！べろべろえろえろえろ！この後軽

うくファックさせて頂いちゃいまあす☆  
軽うくパコらせて頂いちゃいまあす☆ん  
んっ、はあ！べろべろべろべろべろ！ぴー  
すぴーす！旦那さあくん♪息子さあくん♪ぴ  
ーすぴーすぴーす♪いえー！ー！ー！い  
☆☆☆」

「んんんっ！べろべろべろべろえろえろえろ  
えろえろえろ♥♥♥はあ、ああ！と、俊幸い  
ー！大吾おー！ああ！お：お母さん！今から  
不倫中の彼氏と軽うくファックかましちま  
うぜー！はあ！んん、べろっ！べろべろべろべ  
ろ！ふ、二人の仕事中！勉強中に！はあ！んっ、  
べろえろ！えろぢゆるぶちゆれるえろえろえ  
ろ！ああ、ざ：罪悪感ゼロで軽うく♪もうホ  
ントに軽うくパコっちまうぜー！パコかま  
しちまうぜー！ああ！べろべろべろべろべ  
ろ！ぴー、ぴーすぴーす！はあ！と、俊幸ー！大

吾ー！み、見ろ！見てくれ！ほ、ほら、振り返  
ってお母さんを見てくれ(笑)！ああ、あたし、  
んなやべえことしようとしてんのに！はあ！  
こ、こんな笑顔でバツチリダブルピース決めて  
んだぜ？ああ！やべえだろ？さすがにやべえ  
だろ？はあ、えろえろれろれろ！ほ、ほ  
ら！ぴ、ぴーすぴーす！だぶるぴーす！に…に  
こっ♥にこにこにつこり♥はあ！べろべろべ  
ろ！こ、これから不倫ファックかますのに！家  
族を裏切り倒すのに！家族に向かってぴーす  
ぴーすだっぶるぴいゝゝゝす☆☆☆んん！は  
あ！べろべろべろべろ！えろえろれろれ  
ろれろ！これから不倫チンポキメんのに！家  
族に向かって、にこっ♥にこっ♥にこにこにつ  
こり♥家族に向かってにこにこにつこり♥家  
族に向かってとびきりぴゅあぴゅあすまあゝ  
いる♥♥♥」

（あああああ！やべえやべえやべえ！これはさすがにやべえ！ああ！はあっ！もう超興奮するうううううう！！！！）

沼尾も初美も、本当に二人の家族に届いてしまいかもしれない大声を張りあげていた。あまりの背徳感に、初美は頭がおかしくなりそうだった。無論、これは沼尾が提案したプレイだった。朝、夫と息子を見送った直後、彼等にバレるかもしれないスリルを味わいながら、玄関先の路上で家族に向かってベロチューインモラルメッセージ…。

妻として、母として、ありえないほど最低な行為に手を染めながら、初美は二人の家族の後ろ姿から決して視線を外さなかった。やがて、その背中が角の向こうへと消えた。角を曲がる際がこちらを見られるリスクが一番高いと思われたが、その間も初美は決して沼尾から離れ

ようとしなかった。唾液まみれのお互いの舌もべつとりとくつつけたままだった。

（ああ…やべえ…やっべえ…マジでなんちゅうことやらせんだよ…このおっさん…）

ひとまず家族に露見する危機は去ったが、初美は興奮冷めやらぬままだった。むしろ制御を失ったみたいに頭がどんどん熱くなっていく。初美は、もう自分を抑えられなかった。

「ああっ！はあ！沼尾さん！沼尾さん！好き  
いいいい！んんっ、ぶちゅうううううう♡は  
あ、べろべろべろべろっ♡ぶちゅっちゅ  
ううう♡」

彼の唇から口を離すと、吹き出物だらけの不潔な顔面にいきなり吸いつき、さらに舌を暴れさせて顔の表面を思い切り舐めたくったのだった。

「なはっ！はあ！ああ、くすぐったいですよ、

初美さん！にゃは！」

「はあ！ああ！んん、ぶちゅちゅうううう！れろれろれろれろ！」

沼尾は身をよじって抵抗するが、初美は逃がさなかった。シンプルに後ろで束ねただけの長い金髪を振り乱し、彼の顔面を舌で激しく愛撫し続けた。さらにそれだけでは飽き足らず、舌を顔面の上部へとどんだんのぼらせていった。そしてそのまま頭頂部へと到達する。少し背伸びをした初美は、毛髪を失った沼尾の哀れなハゲ頭に、迷うことなく全力で舌を這わせた。

「んんっ！べろべろべろべろべろっ！ぢゆるえるれろえろれろっ！ぶちゅれるえろぬちゅぶちゅれるずちゅぬちゅっ！んんっ！ぶちゅっちゅっちゅっううううう♡♡♡」

気が触れたかのような舌の蠕動だった。実際、脳がエレクトロしているようなただならない感

覚があった。が、五十代後半の親父のハゲ頭を舐めるというこの行為を、初美は紛れもなく自らの意思でやっていたのだった。それは、至って冷静な判断だった。

（ああ！くせえくせえくせえくせえくせえ！このおっさんの口も舌も顔面もハゲ頭も！もう全部全部全部死ぬほどくせええええええええ！！！はあっ！くさくてくさくてくさくてくさくてくさくて死ぬほどくさくて！ああ！さ…さ…さいっこおおおおおおお！ほおっ！好き！好き好き好き好きいい！あたし沼尾さんの味好き！沼尾さんのこのくせえ味がもう死ぬほどすきいいいいいいいい！！！！）

初美の味覚に到来するのは、決して美味とはいえないもののはずだった。だが、初美はそれを味わうことに、えもいわれぬ快感を覚えていた。そんな風に感覚が歪むほど、勝気な元ヤン

キーお母さんはこの変態キモ親父に変えられてしまっていたのだ。

「んんっ！ぶちゅ！えろえろえろ！べろべろべろ！ああ！好き！沼尾さん大好き！んん、ぶちゅぐちゅ！ちゅっ♥ちゅっ♥ちゅっ♥」

「にやはは！ああ、すごい：初美さん：一体どうしたんですか？すごい興奮っぷりじゃないですか？によほほ♪」

沼尾の問いに、初美は彼の頭部をべろべろ舐め続けながら答える。

「はあ！べろべろべろ！あ：あんたのせいだろうがよ！あんたが：んん、れろれろぶちゅれろ！ぬ、沼尾さんがあんなやべえことさせっから、はあ！えろえろちゅちゅちゅちゅ♥んん：あ、あたし：火、ついちまったんだろ！はあ！ホント：べろべろ：なんてことさせんだよ：家族がまだ近くにいんのにべろチューしながら



らあんなこと言わせるなんて……んん……ぶちゅ  
ぐちゅちゅぱちゅぱ♥ああ……マジなに考えて  
んだよ……えろれろ♥……絶対頭おかしいだろ……  
ん……ちゅぱちゅぱちゅぱ♥……はあ……ホントし  
ようがねえおっさんだぜ……この……変態キモ親  
父が！ああ！べろべろべろべろべろべろべろ！」

初美は呆れ果てたように言った。本音だった。沼尾は件の背徳プレイを敢行するために、朝早くから上妻家近くの物影に身を潜め、長時間待機していたのだった。そして初美はそれを知っていたながら、素知らぬ顔でいつも通り家族を見送った。すぐ直後にレロレロと不倫ベロチューをするとうわかっていながら。改めて考えると、家族に対するとんでもない裏切りだった。思い出すだけでゾクゾクする…。

「あはははは(笑)。すみませんねえ…変態で…でもそんなに嫌なら…断ればいいじゃないで

すか？もう私は…あなたを脅迫しているわけ  
ではないんですから…強制力は絶対ではない  
んですよ？」

沼尾のその言葉に、初美は。

「はあ！そ、そんな…べろべろ♥んん…んなこ  
と出来るわけねえだろ！ああ…か…彼氏の…  
だ…大好きな彼氏の頼みを断るなんて…んん、  
ぶちゆくちゅちゅぱちゅぱ♥…あ、あんただっ  
てわかってんだろ？…あたしにんなこと出来  
ねえって…はあ…れろれろえろえろ♥…あた  
し…あ…あんたにガチで惚れてんだから…は  
あ…ちゅるちゅるえる♥…そ…それに…あ  
たし…あ…あんたにああいいう変態な命令され  
んの大好きなんだよ…べろべろ♥はあ…ま…  
マゾ心が刺激されて…マジたまんねえんだよ  
…ああ…えろえろえろえろ♥」

「ふふふ…ということは…初美さんも…変態

ということですね？」

初美は即答する。

「うん…あたし…変態♪もう…超変態だぜ？あはは！いえ☆」

細眉で目つきの悪い元ヤンキーお母さんは、そのキャラにふさわしくないセリフを堂々吐きながら、弾けるような満面の笑みを浮かべていた…。

「ふふっ…いいですね…あなたは本当に最高の彼女ですよ…では…彼氏の私が命令します…初美…今…この場所で…あなたが家族と暮らすお家の玄関先のこの路上で…セックスさせなさい」

「べろべろ…なっ」

初美は思わず、ハゲ頭を舐めていた舌の動きを止めてしまう。そして体を離し、真正面から彼の目を見る。

「ま…マジで言ってるのかよ？…さすがに嘘だよな…沼尾さん？」

無論、セックス自体は全然余裕でするつもりだった。だが、ベロチューまでは外で出来ても、さすがにセックスは家の中に場所を変えてするものだとばかり思っていた。彼と付き合っていく上でありとあらゆることに対して覚悟は出来ているつもりだったが、いくらなんでもその提案は信じ難かった。

「いいえ…私は至って本気ですよ…その証拠に…ほれ」

「!!!!!!」

初美は度肝を抜かれる。沼尾はなんら躊躇うことなく、ズボンのファスナーを下ろして平然とチンポを放りだしたのだった。

「…さあ初美さん…セックスをしましょう…今…この場所で…大丈夫…全部脱ぐわけじゃ

ありませんから……人が来たなら……すぐ離れれば平気ですよ……」

「はあ……んん……ゴクツ」

長さは平均以下だが、その代わり異様な太さを誇る沼尾の歪なチンポは、既にギンギンに勃起していた。勿論しつかりズル剥けになり、露出した生々しい亀頭から、蠱惑的な雄の匂いが鼻先まで香り立ってくるかのようだった。

「んはあ……ああ……」

初美は……。

（…はあ…ああ…し……してえ…ああっ…し  
てえしてえしてえしてえ！してえええええ  
え！はあっ！い、家の前の路上で！大切な家族  
の家の前の路上で！ま、まだローンが残ってて  
俊幸が頑張って働いて払ってくれてる家の前  
の路上で！はあ！ああっ！あたし！あたし！  
……沼尾さんとセックスしてええええええ

え！ああ！もう思いっ切り路上交尾してええ  
ええ！家族裏切り交尾してええええ！してえ  
してえしてえ！しまくりてえ！やりまくりて  
え！はあっ！家の前でこのおっさんのチンポ  
やりまくりてええええええええ！！！！）

突き抜けた興奮に支配されて、内心で絶叫し  
ていた。

「はあ：ああ：んん……ゴクツ」

この後我が身に到来するめくるめく甘美な  
刺激を想像して、元ヤンキーお母さんは、大き  
く唾を飲み込んだ…。

喧嘩最強元ヤンキーお母さんが  
キモデブハゲ親父に脅迫されて  
体も心も奪われる話2

（絶望寝取られ結婚式編）

034

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。  
また、登場人物は全員十八歳以上です。

「んんっ！べろべろべろべろ！れろれろれろれろれろ！」

玄関先の路上に膝をついた初美は、沼尾のチンポの根元を右手で軽くつまむようにし、その亀頭に高速で舌を走らせていた。沼尾は相変わらずチンポをあまり洗ってないらしく、饅えたような独特の悪臭が鼻孔に襲いかかったが、初美はもはやまるで意に介さなかった。

この場でのセックスを受諾した彼女に、沼尾はまずフェラを命じた。初美はもう迷うことなく跪き、その巨根に堂々口をつけたのだった。「はあ…ん…ちゅぽっ！ちゅぽっちゅぽっちゅぽっ！じゅぽじゅぽじゅぽっ！ずぽずぽ！ぬぽぬぽぬぽ！」

続けて極太の陰茎を大きく開いた口でぱっくりと啜え込み、頭を前後させてさらなる卑猥



な口淫に及ぶ。沼尾の体液と初美の唾液がじゅくじゅくと混じり合い、上妻家前のアスファルトにぽとぽと落ちる…。

（はあ…やべえ…マジやっべえ…ホントにしやぶってる…家の前の路上で…ホントにおっさんのチンポ…キモ親父の超くせえチンポ…しやぶっちゃまつてる…あたし…）

つい先程、初美はこの場所で笑顔を浮かべて家族を見送ったのだった。母親らしい甲斐甲斐しい様子で。だが同じ場所で、今はヨダレを垂らして獣のようにチンポに喰らいついている…。あまりの不道德感に、気を失ってしまいそうだった。

そして勿論、こんな路上でことに及べば、いつ近所の人に目撃されてしまうかわかったものじゃない。激烈な不安と焦燥に、初美の胸は早鐘を打たないわけにはいかなかった。

（はあ…どうしよう…近所の奥さん連中に…  
見られでもしたら…ああ…こんなことしてる  
とこ…ろ…路上で…不倫相手のチンポ…しゃ  
ぶってるとこ…見られたら…はあ…も…もし  
そんなことになっちまったら…もう完全にお  
しまいじゃねえか…あたし…人間として…終  
了じゃねえか…ああ…でも…もういつそ  
のこと……み…見られてえかも…はあ…もう  
この際…近所の人達全員に…見られちまいて  
えかも、あたし……はあ…あ…あたしの本性…  
あたしの…さ…最低な本性を…ああ…ゴクッ  
…）

そんな破滅的な瞬間を夢想して、初美はクラ  
ツとしてしまう。

「んん！ぶちゅえるれろれろ！べろえろぐち  
ゆれるえろれろえろ！ぢゅぽちゅぽえるえろ  
れろえろぢゅぽでゅぽちゅぽちゅぽっ！」

頭を激しく前後させながら、初美は闇雲に舌を暴れさせて口内のチンポに無茶苦茶にしやぶりつく。もはや味わいなれた苦味を伴う沼尾のチンポ汁が、喉にどんどん流れ込む。

（ああ！うめえうめえうめえ！沼尾さんのチンポうめえ！くさくて苦くて！はあっ！このチンポマジ最高！キモい五十代の変態おっさんのチンポマジ最高！はあ！好き！このチンポ好きこのチンポ好き！チンポ好きチンポ好きチンポ好きチンポ好き！好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き！チンポチンポチンポ！はあ！ああっ！このおっさんのくっせえくっせえチンポホント好き！くさすぎチンポマジで好き！心から好き！はあ！ああっ！み…み…見て！近所の奥さん方！近所の人達！ああ…し、幸せな近所の真っ当な家族の人達！はあ！見て見て見て見